である。バロック式の建造物がみられ，全体にヨーッパの香りが高い。郊外のプーシュキンのエカテリーナ宮やペトロボレッツやパブロフスクの宮殿など，戦争で破壊されたものも今は金泥も鮮やかに復原されている。歴史的遺産を大切に保存する精神と共産主義の教義が矛盾なく並列している現実は，とかく短絡的精神構造の日本人の目には，複雑異様なものに映る。

モスクワ東郊のザゴルスクには，ロシア正教の総本山があり，神学校がある。全国各地から巡礼団が雲の如くに押し寄せ，燈明をかゝげ，聖水を飲み，敬虔な祈りを捧げる。神父の司る宗教儀式もカトリック教会と同じに厳粛であり，ミサの青年は教会の創立者の名を挙げて讃える。他の場所で見た教会はすべて過去のものであり博物館であったりしたが，こゝだけは宗教は依然として息づき，根絶やすことの出来ない事実を示していた。　　（1978，1，21）

装身具による地域区分の試み

ーネパールの場合ー

向　後　紀代美

ネパールの工業を研究テーマにしていた私が，装身具に興味をもつようになったのは，4年前（1975年）北西インドのスリナガルの裏街で奇妙な石を見たことがきっかけであった。チベット人青年が首にさげていたその小さな石は，黒地に白で円や幾何学模様が入っており，長さ3センチ，直径1.5センチほどの紡錘形をしていた。チベット人はこの丸い模様を「目」と考え，この「目」が病気や災いから身を護ってくれると信じているという話だった。このチベット版「お守り」は1個1万円以上もする。1世帯の月平均所得が約3000円というインドで，1万円といえば大金である。日本に持ち帰っても，おそらく買う人はいないと思われるそんな石に，なぜチベット人はそれほどの価値をおくのだろうか。私はその石をスリナガルだけでなく，ラダック地方でも，またインド北東部のダージリンやカリンポン，そしてネパール各地でチベット系住民のみが身につけているのを見た。その石（チベット語でスィーまたはズィーという）は，ヒマラヤ山麓を旅するとき，チベット系住民を識別するよい指標となった。

この地域では装身具は単なる衣服の付属品ではなく，それ以上の意味をもっている。装身具の意味を知るには，まずこの地域を知らねばならないだろう。ちなみにネパールは，北海道の約2倍（14万平方キロ）という狭い面積であるにもかかわらず，自然条件，人文条件とも実に多様に富んだ国である。南部はガンジス沖積平野の北端にあたり，標高200メートル前後で，バナナ繁る亜熱帯的景観を呈する一方，北部は世界最高峰のエベレストをはじめとする8000メートル級の高峰が8座もある大ヒマラヤ山脈の氷雪の世界となっている。そこに住む人々も多数の民族からなっており南のインド国境沿いには，地中海型の容貌をし，インド，アーリア系の言語を話す住民がおり，北にはシェルパをはじめとするモンゴロイド型の容貌をし，チベット・ビルマ語系の言語を話す住民がいる。そしてその中間にあるマハバーラタ山脈やシワリーク山脈の地域（ネパール語でパハールという）は，南のインド文明（ヒンドラ文明ともいえる）と北のチベット文明，西のイスラム文明という三大文明

がぶつかり合い，土着の部族文化ととけ合って文化の重層地帯をつくり出している地域である。この中間地域こそ，最もネパール的な特色をもつ地域といえよう。

先のスィーという石の例でもわかるように，装身具はネパールでは人々の生活に欠かせない存在である。祭りなどのハレの日ばかりでなく，畑仕事をするときも，水くみ，洗濯などの家事をするときも，寝るときでさえつけていて，はずさない。このような装身具という「文化要素」で，ネパールを地域区分してみると，おもしろいことに前述した三地域とぴったり重なることがわかった。まず北部では，スィーの他にトルコ石やサンゴを多用し，模様は蓮の花など仏教関係のものが多い。用途は，護符としてのスィーやガウ（お守り用の金属箱）など，呪術的な意味が強い。また性や年令による分業が少ないチベット社会を反映して，装身具も男女による差異が少ない。そして，交易や移牧など地域的移動の多い生活は，精巧な銀細工の飾りがついた「七つ道具」という用と美を兼ねそなえた装身具を生み出した。

次に，中間山地及びカトマンズ盆地で，最も広く用いられる重要な装身具はティラリという円筒型の金の飾りである。ポテ（ビーズ）でペンダントのように下げる。ティラリは婚資として夫から妻に贈られる装身具で，既婚女性のシンボルである。その他女性は一般に耳，鼻，首，腕，指，足首，足の指といたるところに二十金の装身具をつけるが，これは装飾と同時に財産としての意味をもっている。この地域の住民でネワール族のみは男女とも鼻飾りをつけない。北部のチベット系住民もつけないから，鼻飾りだけからいえば，ネワール族はチベット系に近いといえるが，早急に結論づけるのは危険であろう。この地域の装身具は北部ほど宗教との結びつきが強くなく，むしろ婚礼をはじめとする通過儀礼との関係が深いように思われる。

南部地域は，つい最近まで一部をのぞいて，ジャングルでマラリヤの多い地域だったため，一般的研究が進んでおらず，また私もタルー族の村に行ったのみなのではっきりとはいえないが，隣接するインドのビハール州，西ベンガル洲，パンジャブ州，ＶＰ州などとほゞ同じ装身具（ハスリという銀の首輪など）をつけているようである。　　（１９７８，３，１８）